

ロボットクリエイター

高橋 智隆氏 インタビュー

——ロボットを作るようになった経緯を教えてください。

もともとは「鉄腕アトム」の影響を受け、ロボットを作る科学者になりたいと思っていました。他に興味は移ったものの、京大に入ったときにまた「ロボットをやろう!」と思って、一人でごそごそ作り始めました。ベンチャーを起業したのは成り行きに任せた結果です。自分の好きなロボットを作っていれば楽しいし、なんとかやっていけそうだったからです。大学発ベンチャーを取り巻く環境が良くなり、京大でも起業や経営に関する相談窓口ができるなどしたことが、起業に踏み切るのを後押ししてくれました。VBLには、もともと特許相談室に来る以外関わりはありませんでしたが、独立を機に松重副学長がインキュベーション(注)を作って下さり、VBLに事務所を構えることができました。

(注) 新しい事業の創設を支援する空間

——ロボット以外では何に興味をお持ちですか？

自動車に興味があります。車は外装に非常に高いクオリティが要求されるものです。不細工にならないように、面の平滑度や部品のつなぎ目の隙間などに神経を使います。これはロボットデザインに対する僕の姿勢の原点でもあります。また、展示発表のやり方も研究しています。ロボットのポテンシャルを最大限

に引き出すためには、うまくデザインされた場所に展示する必要があります。ロボットを見せる我々自身のファッションにも気を遣うよう心がけています。

——「エボルタ(写真1)」を開発したときのエピソードを教えてください。

僕が子どものころから、松下電器(現Panasonic)は電池でおもちゃを動かすCMを作っていました。最近はおキシライド乾電池で飛行機を飛ばしていましたね。今回は、長持ちする電池「EVOLTA」をアピールしながら、いわゆる「ロボット」を動かしたいというコンセプトでお話を頂きました。

グランドキャニオンでの実証実験では、行ったは良いものの、自然界ならではのトラブルに悩まされました。風は強いし天気はめちゃくちゃ、ロープにサボテンのとげが刺さって邪魔になったこともありました。結局6回目ですべて成功しましたね。崖の高さは530m。途中から「エボルタ」の姿を双眼鏡でも追えなくなり、救急箱の中にあった聴診器をロープに当てて、動作音で状態を確認していました。

たかはし ともたか

1975年、大阪府出身。立命館大学を卒業後、京都大学工学部に入学し機械電子工学を学ぶ。

2003年には個人事業である「ロボ・ガレージ」を創業。以降、クロイノ(写真左)、FT(同中央)など、個性的な動作と優れたデザインを兼ね備えたロボットを開発。日本を代表するクリエイターの一人である。

——最近では「MURASAKI(写真2)」を開発されましたね？

世界各地でロボットを展示・紹介しましたが、そういえば日本的な場所で発表したことがないなと思っていました。ちょうどそのとき、寺にロボット個展を出してみないかという話が入ってきました。外国人から見るとロボットは、日本の最先端技術であり、クールなポップカルチャーの延長なんです。クリエイターとして、古くから伝わる日本文化とのコラボレーションは非常に面白い試みでした。

高橋さんが最近開発したロボットたち

(写真1)



(写真1) Panasonicの乾電池「EVOLTA」を2本使い、グランドキャニオンに張られたロープを登る「エボルタ」。その撮影シーンを使ったCMは印象的。

(写真2)



(写真2)「源氏物語千年紀in湖都大津」にて展示されたロボット「MURASAKI」。落ち着いたデザインだが、近代的でクール。

VBL(ベンチャービジネスラボラトリ)について……

高橋氏が起業する際に利用したVBL。今回は職員の方にもお話を伺いました。

・高橋智隆氏について

高橋さんとVBLとのお付き合いは、2000年に当時VBLが開設していた特許相談室を介して「二足歩行型ロボット」の特許を出願されたところに始まります。「ロボ・ガレージ」は、2003年にスタートした施設利用事業「京大ベンチャーズ」の適用第1号です。その後も、彼には奨励研究員あるいは技術補佐員として活動に協力していただけてきました。

・VBLを訪ねる人たち

VBLを訪ねて来られるみなさんからは、パイタリティーや行動力が感じられます。実際にベンチャーをスタートされる方には、物腰が柔らかい熱血漢というタイプが多いように感じます。

・VBLを利用するには

まずは、VBL事務局(E-mail: office@vbl.kyoto-u.ac.jp)にご連絡ください。内容に応じて、担当のスタッフが回答・対応いたします。



VBLは次世代のベンチャービジネスを担う人材の育成やこれから起業しようとする人を支援するために、さまざまな取り組みを行っている。

——製作中のロボットについて何かヒントをお願いします。

新しいロボットを出すごとに、新しい構造を組み込むようにしているのですが、今回は、より素早く、より軽快に動くロボットを目指しています。走ることもできるように新しい構造を考えて、京大を通して特許も出願中です。

作りながらも更にいろいろなアイデアが浮かんでくるので、完成がどんどん遅れているんですがね。この記事が出るころには完成していただいています(笑)。

——ロボットを作っていく上での目標を教えてください。

大企業のロボットに求められるのは総合力ですが、ベンチャーとして作る僕のロボットは、一点突破型です。運動性能、デザイン、知能、耐久性……。企業がデパートなら我々は専門店で、それぞれ良いところがあります。そのうち利点同士が合わさって、総合的により良いものになっていけばいいと思いますね。最終的には、一家に一台ロボット、という時代を自分の手で手繰り寄せたいです。

その目標を達成するためには、レスキューロボットなどのような特殊なロボットから作り始めるのは不自然だと思います。自動車を作る前に消防車を作ろうとしているようなものだからです。ロボットを持つことがスタイリッシュであると世の中に認識してもらい、その格好



快く取材に応じてくださった高橋氏

ポットを媒体としてアバター的に他者とのコミュニケーションに利用したり、ロボットの知能レベルが上がれば、ロボット自身と話すこと自体が目的となり得るでしょう。

——最後になりますが、京大生にひとことお願いします。

京大生の起業意欲はとても低いですね。それなりの就職先が用意されていて、わざわざ起業しようとする人が少ないのでしょう。

でも、僕としては、一度企業に就職しても、やりたいことがあったら思い切って起業してみるといいと思います。みなさんは京大生ですから、失敗したって、どこかの会社が拾ってくれるでしょう? 「京大卒」を保険にして、もっとリスクな挑戦をしてみてもいいんじゃないでしょうか。

——ありがとうございました。(VA・えむいち)



はみだし
すてーじ

親友が欲しい。
⇒⇒の人が問いかけてますよ？

(農・1 ピピンバ)
(編)

はみだし
すてーじ

カスでも友ですか？ (回文)
⇒⇐の人は受け入れてくれるはず。

(薬・3 さかさ)
(編)